

令和3年10月1日

小野寺委員

私からは、今後のセーリング競技の普及策についてお伺いします。東京2020オリンピックにおけるセーリング競技については、先行会派も多岐にわたって質疑をされていましたが、多少重複するかもしれませんが、その点はお許しいただきたいと思います。

まず、様々な困難な状況が立ち上がる中で、これといった事故もなく無事競技が終了したことについて、県当局の皆様の御尽力に心から敬意を表したいと思います。57年前に続いて、江の島が再びオリンピックの会場となったことは、本県の誇りであることは論を待たないと思います。

よく、レガシーという言葉が語られるわけですが、これは大会が終わったら自然にできているというのではなく、むしろ、これから時間をかけて築いていくものだと思います。

今回の五輪開催を契機に、ヨットといえば神奈川というぐらいにセーリング競技を普及させることが、私は真のレガシーではないかと考えますので、その点について幾つかお伺いします。

初めに、セーリング競技が江の島で開催されることが決定してから、これまで本県としても様々な機運醸成や普及の取組をしてきたと思います。その点は五輪開催前にも議論されてきたところですが、多くの人にとって、これまでプレーしたこともなく見たこともないセーリング競技について、その普及を図るに当たって、様々な工夫、努力が求められてきたと思うのです。これまで県が行ってきた取組を改めて確認させてください。

競技調整担当課長

県では、東京2020大会に向けて、大会の機運醸成やセーリングの普及を進めるため、これまで大きく2つの方向性に沿って取組を進めてきました。

1点目は、セーリングをできるだけ多くの方に知っていただく取組です。県内で開催される各種イベントに出展し、セーリングや東京2020大会を広報するセーリングキャラバンを実施しました。セーリングを知らない方々にチラシを配布するとともに、パネル展示などを行いました。また、東京2020大会に次ぐ大規模国際レースであるセーリングワールドカップが江の島で開催された際には、来場者にレースの進行状況をお伝えし、ガイドブックの配布などを行いました。

2点目は、実際にセーリングに触れて、セーリングの魅力を実感していただく取組です。海に出てセーリングを体験していただく海上体験会をはじめ、クルーザーに乗船しヨットレースを間近で観戦するツアーや、イベント会場に本物のヨットを持ち込み、実際に乗ってもらう陸上体験会などを実施しました。さらに、訪問教室と銘打って、小学校の総合教育の時間を活用させていただき、セーリングやオリンピックに関する授業をはじめ、ロープワークやヨット模型の実験などのワークショップを行いました。

小野寺委員

様々な事業に取り組んでこられたということは理解しました。

そうした事業を進めながら、いろいろなことを感じてこられたと思うのです。これまでの経験を踏まえて、セーリングをこれからさらに普及させていくために、どのような課題があると認識されていますか。

競技調整担当課長

セーリングの普及について、私どもが感じている課題としては、まず、セーリングはそれほどメジャーな競技ではないため、マスメディアや報道を通じて競技自体を見聞きする機会が少なく、セーリングの存在を知ることがどうしても限られてしまうことが挙げられます。また、基本的に沖合で行われる競技であるため、一般の方々にとってスポーツの魅力を実感できるチャンスであるレース観戦が気軽にできず、レースの状況が分かりづらいということも課題です。加えて、セーリングを体験する場所は、基本的にマリーナやヨットハーバーに限られるため、体験する機会が必ずしも多いとは言えないことも課題となっています。

小野寺委員

それでは、今、認識をお尋ねしたわけですが、そうした課題をクリアしていくために、今後、どういう取組が必要と考えているのかお聞かせください。

競技調整担当課長

セーリングの普及を進めるためには、セーリングの魅力を広く伝え、セーリング愛好者の裾野を広げていくことが大切だと考えています。そのためには、これまで取り組んできたように、セーリングを知っていただくこと、セーリングの魅力を実感していただくこと、引き続き多くの方に広めていくことが重要だと認識しています。

今後の取組の具体的な内容はこれから詰めていきますが、将来的な選手の育成や長期的にセーリング愛好者を増やしていくことなどを考えますと、基本的な方向性として、将来を担う若い世代を中心に施策を展開していくことが効果的だと考えています。若い世代にセーリングの楽しさを伝えることで、その御家族や友人にも波及していき、セーリングの裾野がさらに広がっていくことも期待しています。

小野寺委員

選手の育成は大事なことですが、それ以前に愛好者の裾野を広げていくことが大事ではないかと思えます。今、若い世代にアピールをしていくという御答弁でしたが、これも重要な視点であるし、取組であると思っています。

私としては、このセーリングの裾野を広げていくためには、県内の小中高生に向けて、先ほども小学校の出前授業なども行っていたと伺いましたが、子供たちにセーリングが身近なものであると感じてもらおうという必要があると考えています。

神奈川県はそんなに広い県土ではありませんが、東側と南側に長い海岸線を持っているわけです。そうした神奈川県の強みを、セーリングを含めた海洋スポーツ競技に生かしていくため、私は公立、私立問わずに学校教育との連携が有効ではないかと思っているのですが、それについてはいかがですか。

競技調整担当課長

セーリングの魅力若くは若い世代にアピールするためには、学校と連携した取組は効果的だと考えています。

具体的なアイデアとしては、子供向け動画やウェブサイトなど、これまでの取組の中で子供たちにも分かりやすく作成したツールがありますので、これらを学校の中で活用してもらうことや、今後開催されるセーリング関連イベントなどの周知を依頼することなどが考えられるのではないかと考えています。

ただ、学校側の負担となってしまうので、こういった連携が可能なのか、まずは学校関係者を交えて慎重に検討していきたいと考えています。

小野寺委員

今、慎重にという言葉が出ましたが、ぜひ、積極的に進めていただきたいと思えます。

先ほど、長い海岸線に恵まれているなどいろいろなことを申し上げましたが、もっと神奈川県立高校にも、ヨット部のようなものがあるのではないかという気がしています。身近なスポーツとして捉えきれていないというところがあるので、一足飛びに部活をつくるというのはまだ難しいのでしょうか。当然、学校が主体となるわけですから、勝手にはいろいろなことは言えないと思いますが、まずは、連携をしっかりと進めていただいて、ヨットだけではなく、サーフィンなどでも、これだけ良い海があるから、もっと教育に生かしていただきたいと思います。

神奈川県は、条件にすごく恵まれていると思うのです。私は25歳まで海のない埼玉県で過ごしていました。セーリングとは全くの無縁だったのですが、二十六、七歳の頃に、仕事で福岡市を訪れ、その市の中心部である天神から地下鉄で十三、四分行った姪浜駅の近くだったと思いますが、その駅の近くにある小戸公園にヨットハーバーがあったのです。そこで初めてディンギーの操作を教えてもらったのが初体験でした。

その艇の持ち主は、福岡の普通のサラリーマンなのです。そのハーバーは今でもディンギーだと年間10万円以下で預けられるので、身近なスポーツなのです。もちろん競技などというレベルではなく、ただただ海面をひたすら漂うといった感じだったのですが、これなら自分でもできるのではないかと考えて、後に、当時勤めていた会社のクラブ活動の仲間に入れてもらったのです。実際に体験してもらうということが一番ではないかと考えています。

県としても、これまで海上体験会などを実施してこられたと承知しているのですが、その内容と実績について御説明ください。

競技調整担当課長

海上体験会は、平成28年度から令和元年度にかけて、湘南港をはじめとした県内のヨットハーバーで実施しました。小中学生向けや親子向け、障害がある方向けの区分に分けて実施し、これまで参加していただいた人数は、4年間合計で970名となっています。内容としては、東京2020大会に向けてセーリングの魅力を知っていただき、盛り上げにつなげていくため、ヨットに乗るだけではなく、東京2020大会セーリング競技の開設や、ロープワーク、ヨット模型を使った講義なども盛り込んできました。毎回参加定員に対して応募者が多く、

平成 30 年度は 2.4 倍、令和元年度は 3.7 倍の応募倍率となっていました。

小野寺委員

大変な人気を博していたと捉えましたが、実際にその体験会に参加された方の反応にはどのようなものがあるのでしょうか。

競技調整担当課長

実際の参加者からの反応について、海上体験会を実施した際にアンケートを行っており、頂いたアンケートを見ますと、海も風も気持ちよく、またやってみたい、なかなか難しかったが楽しかったといった、楽しかったという反応のほか、また体験して、次回はもっとうまく操作したい、セーリングスクールを紹介してほしいなど、次のステップを目指したいという前向きな反応もありました。

大会が終了した今でも、県民の方からは、今年は開催しないのかといった問合せも頂いています。

小野寺委員

実際に体験するということが、このセーリングの魅力や面白さに気づいていただけるきっかけになると思うのです。今のお話を伺うと、今後もしっかりと継続していったほうがよいし、ぜひそうあってほしいと思うのですが、県としてはどのように考えていますか。

競技調整担当課長

これまで県では、東京 2020 大会を盛り上げるために、機運の醸成に力を入れて取り組んできました。中でもセーリングへの興味を高めるためには、実際に経験していただくことが効果的だと考え、江の島でのセーリング競技開催が決定した翌年の平成 28 年度から海上体験会を実施してきました。

体験会に参加された方の反応などを見ますと、事業の成果については一定の手応えを感じていますが、大会が終わった今、これまでと同じような形で引き続き実施していくことは難しいと考えています。しかし、私どもとしては、今後もセーリングの普及に引き続き取り組み、セーリングの楽しさをもっと多くの方に知っていただきたいという思いを持っています。

そこで、もっと多くの方々にセーリングを体験していただくために、県としてどのような工夫ができるのか、今後、検討していく必要があると考えています。

小野寺委員

なぜ、これまでのように続けることは難しいと考えるのですか。

競技調整担当課長

これまでは、東京 2020 大会を盛り上げていくというミッションの下、県が主体として皆様に体験していただきたいと考えていたのですが、これを持続的にしていくためには、県のみ頑張るということではなく、もっと周りを巻き込むことを考えて、広めていかななくてはいけないのではないかと考えています。

小野寺委員

冒頭で私が申し上げたとおり、オリンピックで終わりではなくて、むしろここから始まると考えないと、セーリングは敷居が高いものだと思っている人も多いから、そういうことでは多分難しいと思います。

県が独り相撲を取っても仕方がないということは今、おっしゃったとおりだと思います。しかし、いろいろな競技団体だけではなく、今は継続性には疑問がついているが、シープロジェクトのような活動と一緒に、海洋スポーツ競技の一環として、もっといろいろなところへ声がけをしていくなど、できることはあると思うのです。何もこれまでの体制をそのままということは全然申し上げていないのであって、様々に、これまでとは違う形、体制でセーリングを今後もしっかり盛り上げていくということをこれから行わないと、レガシーは絶対にできないと思いますので、そこはよろしくお願いしたいと思います。まずは、県民にとってセーリングは垣根が低いものだと思ってもらうために、いろいろなところと連携してください。

冒頭で、ヨットといえば神奈川と言われるぐらいにセーリング人口が増えていけば、それがレガシーではないかと申し上げました。繰り返しになりますが、多くの人が体験できる機会の確保と拡充が必須だと感じます。

先ほどの質問と重複するかもしれませんが、セーリング課をはじめとしたスポーツ局として、現在の課題意識を踏まえて、今後、どのように取り組んでいくのか伺います。

競技調整担当課長

セーリングを体験できる機会を創出していくというためには、人材、施設、設備などはもちろん、実施できる場所も必要です。マリーナやヨットハーバーなど、セーリング関連団体の協力が不可欠となっています。

そこで、まずはこうした団体とセーリングの普及に向けた意見交換なども行いながら、さらなる連携を模索していきたいと考えています。

マリーナからお話を伺っている中では、独自に体験会を実施しているマリーナがあることはあまり知られておらず、また、マリーナ独自に広報を展開することも負担になるといった御指摘も聞いています。

そこで、県としては、今後、県のホームページなど、県が持つ広報ツールに加え、若い世代に直接アピールできるよう、SNSを活用してマリーナの取組やセーリングの魅力を発信するなど、セーリングの裾野を広げる取組をぜひ進めていきたいと考えています。

小野寺委員

今おっしゃったように、関係者からの協力を頂くためには、こちらからも関係者の方々にいろいろ力を貸さなくてはいけないということはもちろんです。実際に、何といたっても一度海に出てもらう、実際に波や風を感じてもらうといった体験は、何よりも重要だと思いますので、そこに結びつくような取組をお願いしたいと思います。

冒頭に申し上げたように、1964年の東京オリンピックに続いて、東京2020大会でも江の島でセーリング競技が行われたという意義をどのようにとどめていくかが大事だと思っています。セーリング、ヨットといえば、日本国中のどの都道府県よりも神奈川なのだと、自他ともに認める存在になってほしいと思っています。それがまさにレガシーだと思っていますので、よろしく願います。

神奈川県には、東京湾、相模湾沿岸に多くのヨットハーバーがあります。セ

ーリングの裾野を広げる素地は、他県に比べて十分にあると私は思っているのです。そのロケーションをぜひ生かして、若い世代をはじめとして多くの県民にサーリングの魅力を知っていただく機会を提供してもらいたいと思います。それによって、サーリングがまさに県民スポーツになるように、今後も御尽力いただきたいと思います。

もちろん、若い人たちだけではありません。ある伊豆半島の町では、70歳ぐらいの高齢者にサーフィンを教えて、すごく楽しんでもらっているという事例もあるのです。サーリングは年齢を重ねても十分に楽しめるスポーツなので、その辺りの御努力をよろしくお願いしたいと思います。